

車輪の下とは

中山 文(教育推進センター)



夏目漱石の『私の個人主義』を紹介した前回から9か月が過ぎた。下記の一節が思い浮かんだ。

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。
 よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる^{ためし}例なし。
 世の中にある人と栖と、またかくの如し。^{すみか}

鴨長明『方丈記』の冒頭である。『枕草子』『徒然草』とともに三大随筆に数えられるが、うろ覚えではあるものの何れの作品の冒頭も記憶にあるのは、国語の授業の遺産であろうか。

春先の「読書ガイド」においても感染症についてふれ、その頃から秋冬が懸念されていたとおり終息の目処は立っていない。「終息」より「収束」、共存を目指す「ウィズコロナ」など。この間、様々なフレーズがうまれては、新たな言葉にはじかれ、消えていったように感じる。時間の経過とともに解明された面があり、予備知識も積み上げられ、良きにつけ悪きにつけ私たちの感染意識も変化したといえよう。そこで上記の一節に思いが及んだ。「うたかた」とは水の表面に浮ぶ泡という。安良岡康作による訳注(講談社学術文庫, 1980)に、なるほどと思ったが、文学作品の一節から何を読み取るかは読み手次第である。

秋口に、『車輪の下』を急に読み返したくなった。前回読んだのは小学生の頃だったように思うが、実吉捷郎 訳の岩波文庫を読み始めて、このような文体だったかと戸惑った。前回読んだものは別の訳者による、児童向けのものだったのだろう。さらには、読み進めていて、このような内容だったのかと新鮮な感覚だった。「なぜ車輪の下なのか」が気になり巻末の解説をめくり、この作品が著者であるヘッセ(Hermann Hesse, 1877-1962)の自伝的小説だとわかった。

この題名がどこからきているのかに関連して、原書ではなく訳本を読むことについて考えた。外国文学の場合はどうしても訳本に頼らざるを得ない。名だたる作家の作品ともなれば、訳本を選ぶことから始まる。訳者によって選定する場合もあるだろう。ヘッセは1946年にノーベル文学賞を受賞しているが、同賞受賞者である日本人作家をはじめ、優れた訳者の手により海外で評価を得た日本文学も多いとされる。『車輪の下』は、環境の変化にあって自我とどう向き合い生きていくか、主人公の苦悩する姿を、作家の意図を汲み取りながら翻訳することの難しさが感じられた一冊である。

「車輪」から派生して、以前から気になっていた「スピード感」(ほとんどの場合は「～をもって」の形で耳にするが)と「スピード」の違いを調べたところ、いくつかの解釈にたどりついた。言葉の意味は時代によって変化し、同じ言葉が真逆の意味を持つことさえある。これもまた、「久しくとどまりたる例なし」なのだろう。意味を正しく理解し、受け手に与える印象もふまえて言葉は使われるべきだと改めて気付かされた。